

**三方五湖の汽水湖沼群漁業システム
(福井県三方五湖地域)**

**日本農業遺産保全計画
(第2期)**

計画期間：令和6年4月～令和11年3月

三方五湖世界農業遺産推進協議会

令和6年3月

農林水産業システムの概要

三方五湖の漁業の歴史的背景は江戸時代に遡り、当湖産の「若州（じゃくしゅう）うなぎ」や「シジミ」は日本最高級の汽水産物として京都へと運ばれ、当湖の漁業価値を高めてきた。現在、134名の漁業者がコイ、フナ、ウナギなどを年間約5t漁獲している。漁獲魚の約3割は地域の家庭消費、約7割は加工・飲食業に活用し年間約5万人の観光客にご当地食として提供している。

当システムの対象地域は、淡水環境の三方湖で400年前から継承される「たたき網漁」、汽水環境の久々子湖で行われるシジミ漁など、それぞれの特性に合った伝統漁法を行う5つの湖と漁村、漁獲魚を直売する近隣農村、不安定な漁業収入を補う里地の水田と梅林、「柴漬け漁」に使用される柴を確保する里山が連環する特徴的なランドスケープを形成する地域的まとまりとして、両町108集落のうち約2割にあたる22集落に絞り込んでいる。

当システムには日本を代表する3つの独創的な特徴がある。

1点目は、社会経済的組織である湖を単位とした漁業組合活動により漁業者の生計を保障し、湖の農業生物多様性を保全している点である。漁業者間の利権争いや一部の大量漁獲といった問題を将来への漁業存続の危機と捉え、明治時代にはいち早く湖単位に協同組合を立ち上げた。漁法のルール化や技術開発、組合間の相互監視による資源保全を積極的に行い、適度な漁獲によって63種という生息魚種が示す豊富な生物多様性を保全している。さらに、干拓などの開発計画や水質悪化に対し、住民を巻き込んで克服してきた。

2点目は、地域の食文化を活用した魚の直売・加工・販売や飲食業により収入を確保してきた点である。三方五湖の漁業に携わる漁業者は、捕獲した魚介類を近隣農村への直販、自ら加工・販売するなどの6次産業に取り組み、漁業の付加価値を自ら高めてきた。また、漁業に加え、飲食店や民宿を経営してフナやウナギなどの料理を提供し、多くの人に食べてもらうために鮮度や味などの工夫を重ねてきた。特にウナギは、現在も最高級ブランドとして、全国各地からその味を求めて多くの人を訪れる。

3点目は、度重なる水害から速やかに回復できる漁具の開発や、収入が不安定な漁業を補う水稻や梅の栽培など、漁業者の工夫を知識システムとして発展させてきた点である。当地域は、度重なる水害を受け、船や漁具の破損による経済損失を被ってきた。漁業者は、破損してもすぐに漁業を再開できるように漁具を小さくし、また、漁業の収入が途絶えた時のリスク分散として水稻や梅栽培との複合により、生計被害を最小限に留め、水害から速やかに回復してきた。

目 次

第 1	はじめに	3
第 2	課題への対応策	4
1	食料及び生計の保障	4
A	脅威及び課題の分析	4
B	脅威及び課題への対応策	4
	(1) 漁業による収入の将来的な不安	4
2	農業生物多様性	9
A	脅威及び課題の分析	9
B	脅威及び課題への対応策	9
	(1) 魚類の生態系に悪影響を与える外来種の増加	9
	(2) 過去に整備されたコンクリート護岸による生物生息域の抑制	1 1
3	地域の伝統的な知識システム	1 4
A	脅威及び課題の分析	1 4
B	脅威及び課題への対応策	1 4
	(1) 漁業者の担い手の減少による伝統漁法技術の衰退	1 4
	(2) 地域での漁業を大切に思う気持ちの希薄化	1 6
4	文化、価値観及び社会組織	1 8
A	脅威及び課題の分析	1 8
B	脅威及び課題への対応策	1 8
	(1) 漁業者の高齢化による漁業協同組合活動の衰退	1 8
	(2) 湖辺集落の食文化や祭りに関わる若年層の減少	1 9
5	ランドスケープ及びシースケープの特徴	2 1
A	脅威及び課題の分析	2 1
B	脅威及び課題への対応策	2 1
	(1) 地域的まとまりを形成する漁業者と住民のつながりの希薄化	2 1
	(2) 漁業者と里山のつながりの希薄化	2 2
6	変化に対するレジリエンス	2 3
A	脅威及び課題の分析	2 3
B	脅威及び課題への対応策	2 3
	(1) 頻繁な洪水等自然災害の激化による漁業収入の減少	2 3
	(2) 気候変動に伴う漁場の生態系変化による漁獲対象魚の減少	2 4
7	多様な主体の参画	2 5
A	脅威及び課題の分析	2 5
B	脅威及び課題への対応策	2 5
	(1) 地域住民の湖を大切に思う気持ちの希薄化	2 5
8	6次産業化の推進	2 7
A	脅威及び課題の分析	2 7
B	脅威及び課題への対応策	2 7
	(1) 伝統的な食文化の価値観の価格転嫁が不十分	2 7
第 3	モニタリング方法	2 9
第 4	考察	2 9

第 1 はじめに

本地域では、伝統的な漁法や漁業協同活動、漁業・水田稲作・梅栽培の繋がりによって育まれた多様な漁業資源により漁業システムが維持されている。しかし、今後、漁業者の高齢化による漁業活動の衰退、漁業収入に対する不安、後継者不足など将来にわたる危惧がある。

本保全計画に基づいて農業遺産を維持・保全及び活用することにより、漁業収入を高め、さらに漁業の後継者が将来にわたって営みを継続する環境を作り、地域全体の活性化、振興に繋げていかなければならない。

そのためには、伝統漁法を継承する担い手の確保、6次産業化による付加価値向上、体験事業等による新たな所得の創出および漁業資源の増殖・保全を、当地区のみならず美浜町・若狭町の重要課題として捉え、県、国、観光業や農林業の各種団体など、あらゆる分野・世代の人たちと連携して活動を展開していかなければならない。

豊かな資源を育む三方五湖と湖の恵みにより営まれる漁業が地域の活力の源となることを目指したい。

【これまでの活動の成果】

日本農業遺産認定により地域に脈々と受け継がれてきた伝統漁法が注目され、あらゆる世代や立場の町民が地域を見つめ直し、地域の価値を再認識する契機となった。

地域内では湖産漁獲物を取扱う店舗が増え、地元スーパーで湖産漁獲物のお惣菜販売が開始された。さらに、時代に合わせた湖産漁獲物の新しい食べ方を提案する新メニューが開発され、地域内外の人たちが手軽に湖産漁獲物を食べられる体制が構築されつつある。

水田養魚の取り組みは順調に拡大しており、田んぼと湖の繋がりを活かして、五湖のめぐみを田んぼで育む体制ができつつある。

小学生から高校生までの子どもたちに対して、関係機関が連携して環境教育を進めており、五湖のめぐみについて学ぶだけでなく、新たに地域の食文化を活かした新商品が開発されるなど、地域の漁業システムに携わる人材の育成が幅広い世代で進みつつある。

漁業者の新たな収入源として伝統漁法の体験事業が始まり、地元観光協会等にも注目されている。北陸新幹線敦賀延伸後の地域の新たな観光資源として位置付けられるなど、伝統漁法を次世代に繋いでいくための持続可能な好循環が生まれつつある。

第 2 課題への対応策

1 食料及び生計の保障

A 脅威及び課題の分析

三方五湖の漁業は天然資源の漁獲によるものであることから、漁業収入は安定せず、収入は不安定である。そのため、漁業者の大半は、直売や6次産業化により付加価値を高め、収入を増やすことにより生計を立ててきた。

しかし、ウナギやシジミなどの歴史的・伝統的価値や素材そのものの価値を十分に価格へ転嫁できていない。また、三方五湖を訪れる年間約100万人の観光客を十分活用できていない。漁業資源の増殖・保全はいうまでもなく、今後は、漁業と観光資源を結び付けた活動により、漁業収入を高めていく必要がある。

さらに、「たたき網漁」などの伝統漁法は観光への活用が不十分であり、魅力向上に向けた戦略づくりが必要である。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 漁業による収入の将来的な不安

ア 三方五湖産水産物の販売額増加による収入の拡大および伝統食のPR強化

a 戦略及び行動、定量目標

三方五湖における漁業収入の拡大のため、三方五湖産水産物の販売額増加による収入の拡大および伝統食のPRを強化する。

「若州うなぎ」等かつての日本最高級ブランドを再構築するため、料理人等と連携して価値に見合うイメージづくりを構築する。さらに、町が参加する物産展等で、伝統食をPRし、誘客の目玉とし、ウナギの販売額を増やしていく。

〔目標指数〕

- ・「若州うなぎ」等の販売額の増加（R4の販売額の2割増）
- ・物産展等での伝統食PR活動の実施：2回（R8単年）
- ・体験メニュー開発、HPの多言語化等のインバウンド向けPRの実施
：1回（R8単年）

b 申請地域の動的保全に対するaの貢献

三方五湖の湖畔には年間約100万人の観光客が訪れる。高品質なウナギや珍

しいフナの刺身などの伝統食は、観光産業と結びつくことで地域産業としての発展が期待でき、漁業システム全体の発展性を高めることにつながる。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：ウナギ、フナ等の漁獲と地域への供給、メニュー開発
- ・ 商工業者：地元観光業者を中心にウナギ、フナ等の利用拡大

◎ 美浜町・若狭町：物産展等での伝統食PR、観光との連携強化、インバウンド向けのPR

- ・ 福井県：料理人等へのPR等、ブランド向上販売戦略の計画策定支援

d 予算の確保予定

町、県、国の補助事業を活用予定

イ 漁業を活用した誘客メニューの磨き上げ

a 戦略及び行動、定量目標

三方五湖における漁業収入の拡大のため、漁業体験や漁具づくり、伝統食など、漁業を活用した誘客メニューの磨き上げを継続する。

三方五湖の伝統漁業と観光を結び付けた誘客メニューの主力の一つとして高い価値を持つようになることを目標とし、農泊の協議会や観光連盟等と連携して、伝統漁法を活用した観光客・教育旅行の受け入れ、観光プログラムの開発を行う。

〔目標指数〕

- ・ 誘客メニューの開発・磨き上げ
- ・ 教育旅行の受け入れ実施：10回（R6～R10累計）

b 申請地域の動的保全に対する a の貢献

「たたき網漁」は世界的に類を見ない珍しい漁法であり、来訪者に対するこの地域への訴求力は非常に高いと考える。その他にも、ウナギ筒漁、シジミ漁などは、いずれも高品質かつ美味なウナギ、フナ、シジミを得るものであり、食を通じた魅力向上が期待できる。

三方五湖の漁業を活用した誘客メニューは、当地域における観光の目玉となることから、観光を通じた地域の産業全体の振興に貢献し、漁業の発展につながる。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：ウナギ、フナ、シジミ等の漁獲、伝統漁法の継続
 - ・ 観光業者：伝統漁法、三方五湖の伝統食の観光客への提供
 - ・ 地域団体：伝統漁法、三方五湖の伝統食を活用した誘客メニューの検討・協力
- ◎ 美浜町・若狭町：関係者の連携調整、情報提供

- ・ 福井県：誘客メニュー磨き上げのための体制強化

d 予算の確保予定

北陸新幹線敦賀延伸後の誘客活動と連携し、必要な予算を検討

ウ 漁業資源回復のための活動強化（シジミの水揚げ量回復に向けた取り組み）

a 戦略及び行動、定量目標

近年、日本海の海面上昇に伴い、生息する浅場も狭まる中で、生息地の確保は大きな課題である。久々子湖においては、シジミ回復に向けた浅場造成の拡大及び既存造成地に対する砂の補給など整備を徹底する。さらに、定着を確実にするための親貝放流等を試験的に実施し、資源の回復を図る。

また、シジミを食べる機会が減少していることから、地域内外で試食会等を開催し、「三方五湖産シジミ」の評価を高め、地域内外で活用を拡大する。

〔目標指数〕

- ・ シジミの水揚げ量：3,000kg（R10単年） ※近年の漁獲量の平均
- ・ 市場調査等による販路拡大
- ・ PR活動の実施

b 申請地域の動的保全に対する a の貢献

久々子湖を中心に産するシジミ（ヤマトシジミ）は、他の産地に比べて粒が大きく大変味が良いため、高品質の特産品として差別化販売するとともに、シジミ漁の継続により漁業システムが保全される。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：シジミ漁の継続と地域への供給、担い手拡大に向けた技術の伝承
- ・ 住民：久々子湖産シジミの活用（日常的な食を通じた生産地の支援）
- ・ 研究者：シジミ生息地再生手法の研究

◎ 美浜町・若狭町：浅場造成のための予算確保、造成に適した砂の確保、放流等のシジミの水揚げ量回復に向けた試験的取り組みの実施

・ 福 井 県：浅場造成のための予算確保支援

d 予算の確保予定

浅場造成、シジミの放流については、町、県、国の補助事業を活用予定

シジミ生息地再生手法の研究については、大学等研究機関が自らの研究テーマとして実施予定

エ 「メーター鯉」などを求めて全国から集まる釣り客やファミリーレジャー拡大による地域収入の増加

a 戦略及び行動、定量目標

当漁業システムでは、漁獲による収入の確保のほか、全国的に知られる湖魚釣り場として来訪する釣り客から遊漁料を徴収することで地域の収入を確保する。

大型のコイ釣りなど全国から訪れる上級釣り客からの遊漁料収入の拡大を図る。

今後、コイ釣りメッカを情報誌などでPR、また、ハゼ釣りやウナギ筒漁体験などファミリーレジャーの地としてPRし、釣り客を増加させる。このような遊漁や体験などを地域の収入源として位置づけ、安定的な収入につなげていく。

〔目標指数〕

- ・ 釣り客数：5,000人（R6～R10累計）
- ・ 「釣りのメッカ三方五湖」の広報活動実施：2回（単年）

b 申請地域の動的保全に対する a の貢献

三方五湖は、人気の釣り場であることから、釣り大会等のイベント実施により魅力を多くの方に発信することで、新規ファンの獲得が期待できる。根強いファンの釣り客を確保することで、地域収入の増加につながる。

各湖において漁業資源の再生産の取組み（水田でのフナ・コイの育成、シジミの浅場造成など）を拡大することで、釣り客への魅力を高めることができ、収入拡大が期待できる。

釣り客の来訪は、食事や宿泊場所の提供など観光業への貢献も大きく、漁業、観光業を含む地域全体での収入を増やすこととなり、釣り客の増加は当漁業シス

テムの継続に貢献することが期待できる。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：釣り場の魅力情報発信、魚介類再生産場所の確保、遊漁料の徴収
- ・ 観光業者：釣り場の魅力情報発信
- ◎ 美浜町・若狭町：観光、イベント情報の発信支援
- ・ 福井県：観光情報の発信支援

d 予算の確保予定

釣り客の誘致や遊漁料の徴収は、漁業協同組合等の独自事業として実施予定

2 農業生物多様性

A 脅威及び課題の分析

過去に整備されたコンクリート護岸や水田用水路は魚類の再生産にとってマイナス効果を与えている。魚類の再生産のためには、水田と湖のつながりを再構築することが必要である。

さらに、三方五湖では、平成12年頃よりブラックバス（オオクチバス）が、平成21年頃よりブルーギルが侵入・拡大し、さらに近年ではアカミミガメの拡大が目立つようになってきており、今後、漁業資源に影響することが考えられる。

そのため、アカミミガメやブラックバスなどの駆除イベントを継続して開催し、住民の参加意識を高める。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 魚類の生態系に悪影響を与える外来種の増加

ア 外来種対策の必要性啓発

a 戦略及び行動、定量目標

外来種の存在は、人為的な放出やペットの逸出など、人の手を介在することが多い。そのため、住民や観光客に対しても外来種の対策に関する情報を提供する必要がある。そこで、外来種対策のため、駆除イベントパンフレット等での周知活動を積極的に行い、防除の必要性を啓発する。

また、アカミミガメやブラックバスなどの住民参加型モニタリングを開催し、調査・駆除活動と併せて、研究者と連携した外来対策講習を実施する。それにより住民の知識の充実を図り、参加意識、地域を良くするための意識・意欲を醸成する。

〔目標指数〕

- ・ 駆除イベントの開催：1回/年
- ・ 啓発資料の配布

b 動的保全に対する a の貢献

外来種の駆除に対する意識啓発の広がりによって、地域をあげた活動に発展することが期待できる。

また住民、研究者と連携したモニタリング実施により、外来生物の現状把握・低密度化が期待できる。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：釣り客への外来種防除の普及啓発
- ・ 町 民：駆除イベント等への参加
- ・ 研究者：研究成果の情報提供

◎ 美浜町・若狭町：外来種防除必要性啓発（イベント開催、パンフレット発行）

- ・ 福 井 県：外来種防除必要性啓発（イベント開催、パンフレット発行）

d 予算の確保予定

町、県の予算で実施予定

イ 外来種の生息数を減少

a 戦略及び行動、定量目標

外来種の効果的な防除方法を検討するとともに、防除計画に基づき防除作業を進める。

外来種駆除協力券を発行し、住民の駆除活動を促進する。一方、外来生物の現状について調査研究が必要であり、研究者、漁業者、行政が連携して推進を図る。

こうした取組みを通じて、三方五湖における外来種の生息数を減少させる。

〔目標指数〕

- ・ 研究機関と連携した外来種の生息数減少を図るための現状把握

（現状報告のための会議：2回/年）

b 動的保全に対する a の貢献

外来種の存在が少なくなると魚類の再生産に必要な稚魚の生育環境が確保され、漁業の対象となる成魚数の増加が期待できる。

また、外来種は多様な生物の脅威でもあり、外来種の減少は生物多様性の保全に寄与する。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：外来種の防除作業

- ・ 住 民：外来種に関する普及啓発、防除
- ・ 研 究 者：外来種の生態調査と効果的な防除方法の提案
- ◎ 美浜町・若狭町：防除計画の策定と防除に必要な予算の確保
- ・ 福 井 県：防除計画の策定と防除に必要な予算の確保の支援

d 予算の確保予定

外来種駆除協力券は、若狭町の予算で実施予定

駆除活動は、漁業者のボランティア活動、調査活動は研究者自らの研究として実施予定

(2) 過去に整備されたコンクリート護岸による生物生息域の抑制

ア コンクリート護岸から自然再生護岸への再整備

a 戦略及び行動、定量目標

自然護岸再生の手引き書に基づき、漁業関係者、河川管理者、研究者と情報共有しながら、計画どおり自然護岸の整備を進める。湖岸の大半を占める過去に整備されたコンクリート護岸は、多様な魚介類の生息を阻害することから、自然再生護岸の整備を進める。既往護岸の防災・減災機能を確保しながら、魚類繁殖地を確保する。

〔目標指数〕

- ・ 自然護岸の整備：2か所/年

b 申請地域の動的保全に対する a の貢献

自然護岸化は、魚類をはじめ、生物多様性の保全に寄与する。さらに、護岸に植物が生育するようになり、水質のさらなる改善が期待できる。

また、自然護岸の景観は、観光地としての価値を高める。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁 業 者：湖の性状をよく知る者として、その知見を計画に情報提供
- ・ 研 究 者：防災・減災を考慮した自然護岸化への知見を提供
- ◎ 美浜町・若狭町：自然護岸に戻せる場所を検討し、事業化を検討
- ・ 福 井 県：自然護岸に戻せる場所を検討し、事業化を検討

d 予算の確保予定

護岸の整備については、国、県の事業を活用し、計画的に実施予定

イ 水田魚道や水田を活用した多様な魚類の育成・保全

a 戦略及び行動、定量目標

多様な魚類が生息する環境を整えるため、漁業者と水田農業者が連携し、水田魚道の維持管理を行う。

水路で採取する天然のフナ・コイの卵を水田で孵化させ、放流する稚魚育成田の取り組みが順調に拡大してきたため、今後は規模を維持し、地域産のフナ・コイの増殖を図る。

また関係者間の連携を強め、育成田の取り組み推進を支援する。特に地域の誇りや文化として継承するため、地元小学校と連携をとり活動する。

〔目標指数〕

・水田養魚育成田の面積：50,000 m² (R10単年)

※現状維持 (54,637 m² (R3))

(参考) 5,196 m² (H25)

b 申請地域の動的保全に対する a の貢献

漁獲対象魚のフナやコイなどの増殖のほか、漁獲対象としないナマズなどの魚類を含めて豊富な生物多様性に貢献する。

地域の様々な主体が連携して取り組むことで、地域をあげて漁業システムを盛り上げることができる。

水田での稚魚育成は、三方五湖の天然に生息するフナ・コイから直接採卵するため、三方五湖系統の遺伝資源の確保に貢献できる。

さらに、子どもたちが採卵し、水田で育成するプロセスを体験学習することは、地域の様々な主体が連携につながり、地域をあげて漁業システムを盛り上げることに貢献できる。

c 各主体の関与の方法

- ・漁業者：フナ・コイ育成田の整備、フナ・コイの湖や水路からの採卵
- ・農業者：水稻栽培をしている水田を生息地として提供

- ・ 地域団体：水田魚道を活用した地域をあげた魚類育成機運の醸成
 - ・ 小 学 校：授業として取り組むことで地域への情報発信
 - ・ 研 究 者：水田でのコイ・フナ類の育成手法の開発
- ◎ 美浜町・若狭町：農業者と漁業者のニーズ、小学校等との調整
- ・ 福 井 県：育成田の技術支援、農業者と漁業者のニーズのマッチング

d 予算の確保予定

育成田の整備、採卵や取り上げ体験にかかる費用等、拡大推進や環境教育に関する費用については県・町の事業を活用予定

水田でのフナ・コイの育成手法の開発については、大学等研究機関が自らの研究テーマとして実施予定

3 地域の伝統的な知識システム

A 脅威及び課題の分析

伝統的な漁業システムであるたたき網漁やウナギ筒漁、シジミ漁などの漁法は、漁業者の高齢化に伴い技術継承に危惧がある。

技術の継承には、後継者の確保や技術の記録、マニュアル化や伝達の仕組みづくりなど体系的な活動が必要である。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 漁業者の担い手の減少による伝統漁法技術の衰退

ア 漁業システムに関わるリーダー・人材の育成

a 戦略及び行動、定量目標

当協議会内に設置したワーキングチームにて、当システムに関わる後継者育成の課題を共有する体制を構築する。

〔目標指数〕

- ・ワーキングチームによる後継者育成検討会の実施：1回（単年）

b 動的保全に対する a の貢献

伝統漁法を「地域の宝」として、文化財的な価値を将来に繋ぐ。

漁業システムに関わるリーダー・人材育成を通じて、地域文化の価値を地域で再確認し、地域への誇りを次世代につなぐことに貢献する。

c 各主体の関与の方法

- ・漁業者：人材育成のための情報整理

◎ 美浜町・若狭町：検討会開催

- ・福井県：検討会の開催支援

d 予算の確保予定

町、県の事業を活用予定

イ 伝統漁法の技術の資料化・マニュアル化

a 戦略及び行動、定量目標

伝統漁法の技術に関する情報を漁業者の言い伝えから文書に記録し、マニュアル化する。伝統漁法の歴史や手法を体系的に資料化し、伝統漁法技術を保全する。

〔目標指数〕

- ・ 伝統漁法の歴史や手法の資料化・マニュアル化：1 種

b 動的保全に対する a の貢献

伝統漁法を「地域の宝」として、文化財的な価値を将来に繋ぐ。

伝統漁法の資料化により計画的に技術を残し、地域文化の価値を地域で再確認することで、地域への誇りを取り戻すことに貢献する。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁 業 者：伝統漁法の情報提供、マニュアル化への協力
- ・ 研 究 者：伝統漁法に関する歴史資料等各種情報提供

◎ 美浜町・若狭町：資料化、マニュアル化作業

- ・ 福 井 県：資料化、マニュアル化作業

d 予算の確保予定

町、県の事業を活用予定

ウ 伝統漁法技術の次世代への継承

a 戦略及び行動、定量目標

たたき網漁等の伝統漁法技術を高校生や大学生、地域内の漁業に関心を持つ住民に対する研修、伝統漁法技術の展示などによって次世代に継承する。

〔目標指数〕

- ・ 伝統漁法等の体験学習の実施：20 回（R 6～R 10 累計）
- ・ 伝統漁法技術の博物館・イベント等での展示：5 回程度（単年）

b 動的保全に対する a の貢献

伝統漁法を「地域の宝」として、文化財的な価値を将来に繋ぐ。

伝統漁法の技術を残す研修会や展示などを実施することにより、地域文化の価値を地域で再確認し、地域への誇りを次世代につなぐことに貢献する。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：伝統漁法技術の情報提供
- ◎ 美浜町・若狭町：伝統漁法技術の収集・整理と研修会の企画・運営
- ・ 福井県：伝統漁法技術の収集・整理と研修会の企画・運営

d 予算の確保予定

町、県の事業を活用予定

(2) 地域での漁業を大切に思う気持ちの希薄化

ア あらゆる世代で五湖めぐみの大切さを学ぶ活動の推進

a 戦略及び行動、定量目標

「子どもラムサールクラブ」による三方五湖の生き物調査などの活動を継続する。また、旅行者を対象とした伝統漁法の体験メニュー・観光プログラムを充実させていく。

あらゆる世代で五湖めぐみの大切さを学ぶ活動を推進し、地域での漁業を大切に思う気持ちを醸成する。

〔目標指数〕

- ・ 子どもラムサールクラブの活動実施：8回程度/年

b 動的保全に対する a の貢献

食を通じて、五湖めぐみを再発見し、世代を超えて情報共有することで、地域と伝統漁業の大切さを再確認することにつなげる。

あらゆる世代で五湖めぐみの大切さを学ぶことは、世代間のつながりの強化や地域力を強化することにも貢献する。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：漁業の語り部として子どもラムサールクラブの活動に参加
- ・ 住民：子どもラムサールクラブの活動に参加
- ◎ 美浜町・若狭町：子どもラムサールクラブに係る企画・関係者調整

- ・ 福 井 県：子どもラムサークルクラブの運営支援

d 予算の確保予定

町、県の事業を活用予定

イ 五湖のめぐみをいただく給食の推進

a 戦略及び行動、定量目標

寒ブリの缶詰の試食等に加え、ウナギ、フナ、コイ、テナガエビ、シジミなど三方五湖のめぐみを給食として子どもたちに提供し、五湖のめぐみを食べる機会を増やしていく。あるいは、子どもたち自らが参加する五湖のめぐみ調理実習などを実施する。

〔目標指数〕

- ・ 五湖のめぐみ給食や調理実習の実施：1 回/年

b 動的保全に対する a の貢献

食を通じて、五湖のめぐみを再発見し、世代を超えて情報共有することで、地域と伝統漁業の大切さを再確認することにつながる。

子どもころから五湖のめぐみにふれあうことは、多世代にわたって地域を守る気持ちの向上につながる。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁 業 者：湖の魚介類の提供
- ・ 学 校：学校給食での五湖のめぐみに関する学習の実施、給食の実施

◎ 美浜町・若狭町：学校給食、調理実習、出前授業の企画

- ・ 福 井 県：学校給食、調理実習、出前授業の企画運営支援

d 予算の確保予定

町、県の事業を活用予定

4 文化、価値観及び社会組織

A 脅威及び課題の分析

漁業者の高齢化が進行しており、今後の漁業協同組合活動が弱体化することが懸念される。また、漁業者は神社の運営組織と重なっており、高齢化による祭礼の維持に不安がある。

現在、湖辺集落の若い世代においては、湖産漁獲物を得る機会が減り、調理したり食べることもそのものも減りつつあることから、地域の食文化の継承が危惧され、ひいては地域住民の漁業への理解と地域内での後継者確保が課題となる。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 漁業者の高齢化による漁業協同組合活動の衰退

A 漁業者と地域住民の交流促進

a 戦略及び行動、定量目標

漁業協同組合が、子ども、大人向けの漁業体験活動を実施することにより、地域内理解者を拡大し、後継者づくりや新規参入を進めていく。

〔目標指数〕

- ・ 伝統漁法等の体験学習の実施：20回（R6～R10累計）

b 動的保全に対する a の貢献

漁業協同組合により後継者づくりや新規参入を進め地域の活力を高める。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：将来意向の確認、体験活動の実施

◎ 美浜町・若狭町：漁業者意向整理、体験活動の支援、県内外への新規参入PR

- ・ 福井県：県内外への新規参入PR

d 予算の確保予定

町、県の事業を活用予定

(2) 湖辺集落の食文化や祭礼に関わる若年層の減少

ア 湖産漁獲物を食べる食文化継承

a 戦略及び行動、定量目標

湖産漁獲物を使用した家庭料理の試食会や、湖産漁獲物が食べられる店舗のPRを実施し、一般家庭での湖産漁獲物の消費増加を図る。また若い世代の湖産漁獲物消費拡大に繋がるよう、時代に合った調理レシピの開発を継続する。そして、地域をあげて湖産漁獲物の食文化を継承する。

〔目標指数〕

- ・湖産漁獲物の試食会・家庭料理継承研修会の実施
- ・若い世代向けの調理レシピの開発
- ・湖産漁獲物が食べられる店舗のPR：3回（R6～R8累計）

b 動的保全に対するaの貢献

湖産漁獲物を食べる文化の継承は、地域を大切に思う気持ちを醸成し、地域を大切に思う気持ちは地域のつながりを深めることにつながる。

c 各主体の関与の方法

- ・漁業者：湖産漁獲物の提供
- ・地域団体：調理方法の情報提供、技術伝承

◎ 美浜町・若狭町：湖産漁獲物試食会・研修会の実施、地元飲食店とマッチング支援、湖産漁獲物が食べられる店舗のPR

- ・福井県：湖産漁獲物試食会・研修会の実施、湖産漁獲物が食べられる店舗のPR支援

d 予算の確保予定

町、県の事業を活用予定

イ 神社の祭礼の保存と若者の参加促進

a 戦略及び行動、定量目標

地元保存会は、漁業協同組合の協力のもと、祭礼で供物を奉納しており、今後、保存会活動を継続するとともに、伝統文化として活動を記録し、若者へ継承してい

くことで、保存意識を向上することが必要である。

〔目標指数〕

- ・湖の魚介類を供物にした祭礼等の実施：3 か所（R 1 0 単年）
- ・若者の祭礼への参加

b 動的保全に対する a の貢献

祭礼は、漁業のみならず、集落やその地域全体の社会組織と連動している。そのため、神社の祭礼を継続することは、地域社会全体の活性化に貢献する。

c 各主体の関与の方法

- ・漁業者：祭礼への参加、文化伝承への協力
- ◎ 住民：保存会活動、祭礼への積極的参加
- ・神社：祭礼の継続

d 予算の確保予定

予算は不要

5 ランドスケープ及びシースケープの特徴

A 脅威及び課題の分析

三方五湖の汽水湖沼群漁業システムが育むランドスケープは、漁業者、農林業者、地域住民などがつくる社会組織と基盤となる自然環境とが関係し合いながら形成してきたものである。したがって、人口減少や一次産業従事者の減少に伴う地域的まとまりの希薄化は、当システムが育むランドスケープの衰退にもつながる。

今後、地域的まとまりを形成する漁業者と住民のつながりを見つめ直し、さらに強固にすることによって良好なランドスケープを維持する。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 地域的まとまりを形成する漁業者と住民のつながりの希薄化

ア 漁業者と消費者の相互関連の継続

a 戦略及び行動、定量目標

既存の販売所に加え、新規の道の駅やレストランにて、漁獲物を直売することにより漁業者と消費者のつながりを維持し、地域内の販売拠点の拡大や食文化の啓発活動により、漁業者と地域住民のつながりを広げ、ランドスケープを維持する。

〔目標指数〕

- ・湖産漁獲物の取扱い店舗数：11店舗（R10単年） ※現状維持

b 動的保全に対する a の貢献

地域的まとまりの持続と地域の振興

c 各主体の関与の方法

- ・漁業者：湖産漁獲物の直売
- ・住民：湖産漁獲物の活用、食文化啓発活動への参加

◎美浜町・若狭町：食文化啓発活動

- ・福井県：食文化啓発活動の支援

d 予算の確保予定

予算は不要

(2) 漁業者と里山のつながりの希薄化

ア 漁業者と農林業者の相互関連の継続

a 戦略及び行動、定量目標

三方五湖の周辺里地の急峻な斜面では江戸時代より梅栽培が広がっており、美しい四季の里山景観を呈している。また漁業者は里山に生育する樹木の枝葉を活用した伝統漁法の柴漬け漁が江戸時代より行われている。一方で、近年は獣害等により里山環境が変化しているとともに、テナガエビの漁獲量減少に伴う柴漬け漁の規模縮小等、漁業者と里山の繋がりが希薄化している。

農林業者と連携した里山環境の啓発活動により、三方五湖の流域内の山林における間伐等を実施するとともに、三方五湖独特な急峻な斜面、地形を活用した福井梅の振興による景観といった里山環境の保全に繋げる。

〔目標指数〕

- ・ 漁業者と農林業者が連携した間伐等の活動実施：1回（R10単年）

b 動的保全に対する a の貢献

安定的な柴の調達や里山環境の保全により、地域的まとまりを持続させる。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：柴の調達、柴漬け漁の実施
- ・ 農林業者：福井梅の振興、間伐の実施、啓発活動への参加

◎ 美浜町・若狭町：里山環境の啓発活動

- ・ 福井県：里山環境の啓発活動の支援

d 予算の確保予定

予算は不要

6 変化に対するレジリエンス

A 脅威及び課題の分析

近年、地球温暖化が進行するなかで、一度に大量の降雨があつたり、海面上昇が進むなど、漁業を支える生態系の変化や環境変化が懸念される場所である。

三方五湖は流域の下流部にあり、洪水等の自然災害を受けやすい立地にある。また、汽水湖沼群であり海と直接つながっているため、今後、地球規模で想定される地球温暖化に伴う海面上昇が当漁業システムの大きな脅威となる。

そのため、将来的な海面上昇を考慮した漁場の整備や、降雨による災害に対してハード整備に頼らない防災・減災計画に基づいた整備が必要とされる。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 頻繁な洪水等自然災害の激化による漁業収入の減少

ア Eco-DRR（生態系を活用した防災・減災）の継続

a 戦略及び行動、定量目標

自然護岸の再生による洪水の軽減等に向けて、「自然護岸再生の手引書」に基づき、自然護岸の整備を継続して行う。

〔目標指数〕

- ・ 自然護岸の整備：2 か所/年

b 動的保全に対する a の貢献

生態系を活用した防災・減災（グリーンインフラ）は、コンクリートを中心とするハード整備（グレーインフラ）に比べ費用を大きく減らすことが期待でき、現在の良好な自然景観を維持しながら洪水対策等安全な地域づくりに貢献できる。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：漁業を通じて培った知見の提供
- ・ 研究者：グリーンインフラ整備に必要な情報提供
- ◎ 美浜町・若狭町：生態系を活用した自然護岸整備の実施
- ・ 福井県：生態系を活用した自然護岸整備の実施支援

d 予算の確保予定

町、県、国の事業を活用予定

(2) 気候変動に伴う漁場の生態系変化による漁獲対象魚の減少

ア 海面上昇を考慮した漁場の整備

a 戦略及び行動、定量目標

塩分濃度の濃い海水は、下層に進入することから、今後、浅場造成の際、なるべく水深が浅く、かつ、海から距離が離れた場所で整備することにより、濃い海水の影響を受けないシジミ生息地を確保する。

また、高塩分はシジミ以外の他の生物へも影響することが考えられることから、塩分濃度を継続的にモニタリングする。さらに、研究者と連携し高塩分濃度への対応策も検討していく。

〔目標指数〕

- ・ 浅場造成の実施：1 か所（R 8 単年）
- ・ 塩分濃度計測：10 回以上/年

b 動的保全に対する a の貢献

高塩分の影響が少ない浅場造成により、安定的かつ高い品質のシジミ増産につなげる。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：シジミの漁獲、漁獲量やシジミの性状の報告
- ・ 研究者：浅場造成の適地の選定、塩分濃度モニタリング

◎ 美浜町・若狭町：浅場造成の実施

- ・ 福井県：浅場造成の実施支援

d 予算の確保予定

モニタリング予算は不要

浅場造成に関しては、町、県の事業で活用予定

7 多様な主体の参画

A 脅威及び課題の分析

普段の生活の中で、身近な自然を思う気持ちは希薄になりがちである。三方五湖においても同様であり、地域住民にとって大切な存在であるものの、三方五湖の漁業システムにより成立する人と自然のつながりを大切に思う気持ちが薄らいできている。

現在、多様な主体が参画している美化活動、及び環境教育を将来にわたり継続するには、あらゆる世代が湖を大切に思う気持ちを持ち続ける必要がある。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 地域住民の湖を大切に思う気持ちの希薄化

ア 三方五湖を美しく守る活動

a 戦略及び行動、定量目標

三方五湖では、約 30 年間にわたり、三方五湖の湖岸の一斉清掃を行っている。毎年 2 回実施しており、500 人の参加がある。今後も、三方五湖の一斉清掃を継続し、湖岸のゴミを撤去する。

地元漁協と協力し、湖上・湖岸清掃に取り組む。

〔目標指数〕

- ・ 三方五湖一斉清掃の実施：2 回/年
- ・ 地域住民に留まらず、一般観光客も参加する取組みに拡大

b 動的保全に対する a の貢献

一斉清掃は、地域住民の三方五湖を大切に思う気持ちをさらに高める。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：一斉清掃への参加（漁船を使つての清掃）
- ・ 住民：一斉清掃への参加（陸上からの清掃）
- ・ 地域団体：一斉清掃への参加、住民や他団体への参加呼びかけ
- ・ 企業：一斉清掃への参加

◎ 美浜町・若狭町：一斉清掃の企画、広報

- ・ 福 井 県：一斉清掃の広報

d 予算の確保予定

町民ボランティアを前提に、町の事業、地元企業等の協賛金を活用予定
漁船を使った清掃は国の事業を活用予定

イ 子どもたちへ漁業と環境の大切さを伝える体験学習

a 戦略及び行動、定量目標

地域内で当漁業システムの重要性に対する理解を進めるため、三方五湖の伝統漁業を活用した体験学習を推進する。

湖上で直接触れて実感できる漁業体験学習を通じて、子どもたちに、三方五湖の漁業の素晴らしさを伝える。漁業者、学校団体、行政等多様な主体と連携し、実施する。

メディアとも連携し、その活動を広く伝えてもらうことで、三方五湖の魅力を内外に発信する。

〔目標指数〕

- ・ 伝統漁法等の体験学習の実施：20回（R6～R10累計）

b 動的保全に対する a の貢献

漁業体験の拡大により、400年以上の歴史を有するたたき網漁をはじめとする三方五湖の伝統漁法への理解が深まる。特に子どもたちにとって漁業に携わるきっかけにもなり、将来的な担い手の確保も期待できる。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁 業 者：漁業体験学習の実施
- ・ 学 校：伝統漁業を組み込んだ学習時間の設定

◎ 美浜町・若狭町：伝統漁業と体験学習のプログラム作成、関係者調整、取組みに必要な予算の確保

- ・ 福 井 県：伝統漁業の学習に関する技術支援

d 予算の確保予定

学校の授業、町、県の事業を活用予定

8 6次産業化の推進

A 脅威及び課題の分析

三方五湖のウナギやフナは歴史的価値や素材そのものの価値を適正に価格転嫁できていない。消費者にとって湖産漁獲物を食べる場所が限定されており食べる機会が少ない。

商品価値を正しく伝えるための商品づくりや町内外での食イベントなどで、湖産漁獲物の価値をPRし、さらなる付加価値向上を追求し、漁業収入の拡大を図る。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 伝統的な食文化の価値観の価格転嫁が不十分

ア 湖産漁獲物の加工品の商品価値向上

a 戦略及び行動、定量目標

専門家のアドバイスにより物語性のある商品を開発するなど商品価値を向上させる。

〔目標指数〕

- ・ 専門家のアドバイスによる価値向上：5品（R6～R10累計）

b 動的保全に対するaの貢献

商品価値を向上することにより、新たな観光客を取り込み、収入の拡大につなげる。

c 各主体の関与の方法

- ・ 漁業者：湖の魚介類の漁獲、加工販売
- ・ 住民：湖の魚介類の食の推進、加工品の積極活用
- ◎ 美浜町・若狭町：湖の魚介類の価値向上、販売PR等の支援、専門家の派遣
- ・ 福井県：湖の魚介類の価値向上、販売PR等の企画支援

d 予算の確保予定

町、県、国の補助事業を活用予定

イ 湖産漁獲物加工品の地域内消費推進

a 戦略及び行動、定量目標

町内での食イベントや町外・県外での誘客キャンペーン等で湖産漁獲物のPRを行い、消費を拡大する。

地元の旅行業者や飲食店と連携し、新たな誘客メニューや食べ方の模索を行っていき消費の推進を図る。

〔目標指数〕

- ・町内での食イベント等での湖産漁獲物のPR：2回（R10単年）

b 動的保全に対する a の貢献

湖産漁獲物のブランドイメージが高まり、食を求める観光客が増加する。

c 各主体の関与の方法

- ・漁業者：湖の魚介類の漁獲、加工販売
- ・住民：湖産漁獲物加工品の地域内消費
- ・飲食店：湖産漁獲物を活用した新メニューの開発

◎ 美浜町・若狭町：湖産漁獲物加工品の地域内消費の推進

- ・福井県：湖産漁獲物加工品の地域内消費の推進

d 予算の確保予定

町、県、国の補助事業を活用予定

第3 モニタリング方法

保全計画については、「三方五湖世界農業遺産推進協議会」において進捗状況等の確認を行う。毎年度開催する総会において、事業の進捗状況等を報告し、各取組みの実施方法・スケジュールについて確認する。

具体的なモニタリングについては、三方五湖世界農業遺産推進協議会の事務局（福井県中山間農業・畜産課、美浜町産業政策課、若狭町産業振興課）が行う。さまざまな実施主体の進捗状況、課題等を確認し、進捗にあわせて保全計画の修正を行う。

取組状況については、当協議会に設置しているワーキングチーム（研究者、学識経験者等）により評価・検証する。

第4 考察

当地域における最も重要視しなければならない脅威及び課題は、漁業者の高齢化、後継者不足、漁業収入の不安定、漁業資源の減少とこれらに伴う漁業システムそのものの衰退、経済・社会構造の弱体化によって、地域のまとまりが崩れていくことにある。

保全計画の策定によって、こうした課題に対し、漁業者のみならず、両町の住民、町、県、外部の有識者等が課題を共有し、協働する体制が構築される。さらに、生計の保障、農業生物多様性など、細分化した項目で目標を設定し、体系的に施策を策定することで、実施効果を評価しやすいP D C Aサイクルによる実行システムが構築される。

このシステムにより、両町民で課題の共有が生まれ、行動意識が醸成され、行事や活動への参加が拡大する。こうした行動が漁業を中心とする三方五湖漁業システムの重要性の認識、さらに、漁業を発展させる前向きな行動につながると確信する。

個々の課題についての最重要課題は、漁業の担い手対策と漁業収入の向上である。漁業資源の保全、消費拡大、社会活動の維持などは漁業を支える課題と位置付ける。

漁業の担い手については、町内外からの参入を促進するため、あらゆる世代において、三方五湖の漁業実態や重要性を認識する体験活動等を促進し、漁業に携わる人々を増やす。

漁業収入の拡大については、販売額の増加と観光との連携に重点化する。価格額の増加に向け、漁獲物の価値を正当に価格転嫁させる活動を展開、約100万人の観光

客を引き込む工夫など具体案を策定できる体制を構築し、戦略的な活動に結び付ける。

課題と対策を明確にし、細分化した戦略的活動により、三方五湖漁業システムの重要性が再認識され、地域の社会・経済活動に浸透することで、さらなる強固な地域的まとまりが構築され、持続的な漁業システムの基盤が構築される。